

令和元年6月27日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04169

研究課題名(和文) リハビリテーション病院における音楽療法の効果判定と技法開発のための実践的研究

研究課題名(英文) Practical Research Concerning the Evaluation of the Effect and Technique Development of Music Therapy in Rehabilitation Hospitals

研究代表者

小原 依子 (KOHARA, Yoriko)

神戸女子大学・文学部・教授

研究者番号：40388319

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：リハビリテーション病院において、音楽療法の有効性が注目されている「パーキンソン病」を対象とした音楽療法の技法・プログラムの開発を行い、その有効性を検証しながら、これまでに心身障害・認知症等高齢者対象に開発を行ってきた音楽療法用評価表(MTCL-YK(S))について「パーキンソン病」対象用の評価表への改訂を行った。研究協力者間において、評価のしづらさや問題点の検討を重ね、修正版を作成し、信頼性・妥当性検証を行いながら、MTCL-YK(PD)(Music Therapy Check List : Parkinson's Disease version)の評価表の作成を完成するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

音楽療法は、治療法として広義には心理療法に含まれ既存の理論と併用されての利用がなお一般的であり、音楽療法独自の理論的裏付けは未だ確立していないのが現状である。この課題に着手するには、独自の技法とその適応疾患を特定していくという、いわゆる医学モデルを基礎とした研究の蓄積が求められる。そして、その臨床研究に極めて重要となってくる手続きが、音楽療法独自の尺度(評価表)の開発であると考えられる。音楽療法独自の尺度(評価表)の開発を行うことで、多領域で実施されている音楽療法効果についての比較が可能となり、多様な疾患・障害への音楽療法実践プログラム・技法の特定(臨床応用モデル構築)につながることを期待される。

研究成果の概要(英文)：Rehabilitation hospitals consider that music therapy is effective in rehabilitation. The researchers focused on music therapy for "Parkinson's disease," selected and applied effective techniques and programs of music therapy, and verified its effectiveness for the purpose of revising the Music Therapy Check List (MTCL-YK(S)). This list had been first developed to apply to the elderly with such conditions as cognitive impairment, and to patients with mental or physical disorders; this research revised the list to apply to "Parkinson's disease." After the researchers repeatedly examined any problems and the difficulty of evaluation, a revised version was created, and after verifying its credibility and validity, the evaluation list MTCL-YK(PD) (Music Therapy Check List: Parkinson's disease version) was finally completed

研究分野：臨床心理学

キーワード：心理リハビリテーション 音楽療法 効果判定 技法開発 評価表

1. 研究開始当初の背景

近年、医療面でも注目され、臨床応用されてきている「音楽療法」は、少子高齢社会対策や予防医学、健康増進の推進の動向にも伴い、福祉、保健、教育場面で大きな広がりをみせている。今後ますます社会への定着を図るには、その効果の科学的裏付けが求められる。とりわけ音楽療法において最も難しいとされる課題の一つに「効果判定」の問題がある。中でも特に音楽療法の効果を量的に測定する評価手法について、疾患・障害に合わせた評価法として統一されたものは、我が国においては未だ模索段階であり、これらの確立は音楽療法の治療的理論構築がなされていくことの基本的要件であると言える^{6,7)}。

そこで、筆者は、これまで音楽療法用に独自の治療構造を反映した項目設定(4件法で各段階に下位項目設定)を行った「音楽療法用評価表(MTCL-YK: Music Therapy Check List-YK version)」の開発に着手し、さらにその対象領域を広げるべく、兵庫県下の19箇所の高齢者施設・病院等で実践研究体制を持ち、認知症等を中心とした高齢者にも対応したMTCL-YK(S)への改訂作業を行ってきた^{3,4,5)}。この評価表を用いて、要介護度別に音楽療法効果をとらえ、その障害状況と適合する音楽療法技法の関係が示唆されるという結果も得ることができた。同時に、多様な疾患・障害に適用可能であることがわかり、現在、リハビリテーション病院等の主に医療領域での幅広い疾患・障害に対する評価表の改訂および開発を目指している。

2. 研究の目的

本研究では、心身障害、認知症等を主とした高齢者領域で開発を行ってきた「音楽療法用評価表(MTCL-YK(S))」及び、リハビリテーション病院における「注意障害」対象に改訂・開発を行ってきた「音楽療法用評価表(MTCL-YK(DOA: Disorder of Attention version))」を用いて、さらにリハビリテーション病院での音楽療法の有効性が注目されている「パーキンソン病」を対象とした評価表(MTCL-YK(PD: Parkinson's Disease version))への改訂・開発を行うことを目的とした。その際、当該領域において有効な音楽療法プログラム・技法についても平行して検討する。

3. 研究の方法

(1) リハビリテーション病院における音楽療法実践の技法の実態・文献調査と整理、及び本研究で実施する音楽療法プログラム・技法の選定と実践開始

研究協力者と会合をもち、より有効な音楽療法プログラム・技法を吟味・選定し、本研究で実施していく実践内容を確認、決定した

(2) 音楽療法プログラムの有効性検証と、MTCL-YK(S)の信頼性・妥当性検証と修正案1(MTCL-YK(S)-1)の作成

リハビリテーション病院でのパーキンソン病対象の音楽療法において、MTCL-YK(S)を用いて、音楽療法の対象者個人について評価を行い、音楽療法の効果検証と、評価のしづらさや問題点を明らかにし、評価表使用に際しての視点・視座を統一した。

問題点としてあがった点について、音楽療法、臨床心理学、脳神経内科学、整形外科それぞれ専門家間で検討を重ね、項目内容について修正案(MTCL-YK(S)-1)を作成した。

(3) 修正されたMTCL-YK(S)-1の信頼性・妥当性検証と修正案2(MTCL-YK(S)-2)の作成

さらに厳密な信頼性検証を行うために、音楽療法実践の録画映像を、研究協力者間で同時に視聴し、行動観察を行った。その評価をMTCL-YK(S)とMTCL-YK(S)-1で行い、評価者間における評価結果のズレを比較した。その後、さらに音楽療法を5週間実施し、問題点としてあがった点についての整理を行い、修正案MTCL-YK(S)-2を検討した。

(4) 修正案(MTCL-YK(S)-2)の検討と、パーキンソン病対象用音楽療法チェックリスト(MTCL-YK(PD))の確定

MTCL-YK(S)-2について、さらに研究協力者間で下位項目について検討を行い、修正案(MTCL-YK(PD))を作成した。そして最終確定のため、評価表の「修正前」(MTCL-YK(S))と(3)で作成された「修正後」(MTCL-YK(PD))を用いて評価を行い、評価者間のズレが減少しているかどうかを数量的に分析した。

4. 研究成果

(1) リハビリテーション病院における音楽療法実践の技法の実態・文献調査と整理、及び本研究で実施する音楽療法プログラム・技法の選定と実践開始

(1)-1 本研究で用いるMTCL-YK(S)について

医療領域における音楽療法実践の文献研究や実地見学を通して、リハビリテーション病院における音楽療法の有効性として、「注意障害」及び「パーキンソン病」において特に音楽療法実践の需要やその重要性が認められたこと、また、2つの疾患・障害は、評価の際にも大きく異なる点があり、それらを捉えられる指標を作成する必要性が明らかになり、前研究(基盤研究(C): 課題番号15K04169)において「注意障害」の評価表(MTCL-YK(DOA))を作成した。そして、本研究では「パーキンソン病」対象の評価表(MTCL-YK(PD))を作成することを目指し、研究協力者間で検討した結果、その臨床像からMTCL-YK(DOA)からの改訂より、MTCL-YK(S)からの改訂の方が、妥当性が高いことが明らかとなり、本研究では、MTCL-YK(S)を用いて、その改訂と信頼

性・妥当性検証を行っていくこととした。

(1)-2 本研究で実施する音楽療法プログラム・技法の選定と実践開始

音楽療法「パーキンソン病」対象の音楽療法プログラム・技法については、リハビリテーション病院で開発された音楽療法プログラムを基盤として、文献や学会等での情報収集を通して、表1の内容で実施することとなった²⁾。

表1 リハビリテーション病院における音楽療法プログラム²⁾

A) 能動的音楽療法	プログラム内容
発声課題	腹式呼吸の習得 発声練習 母音唱 持続発声
歌唱	共通課題 四季の歌 好みの歌によるリクエスト曲
リズム課題	♩=90~120 メトロノームに合わせ打楽器のリズム打ち 指でタッピング Go-Stop 合図によるリズム打ちの開始と停止 速度は患者の歩行速度+10%を目指す
楽器演奏	ヘルマンハーブ (治療的楽器演奏)
B) 受動的音楽療法	「パーキンソン病に効く音楽療法 CD ブック」 ♩=120 の曲を1日1時間聴取 PT/OT 訓練では携帯用音楽プレーヤーの曲を聞きながら歩行訓練

A)能動的音楽療法では、週4回(40分/回)マンツーマンで音楽療法士と「腹式呼吸や発声法、1分間に速度=90-120のリズム課題、歌唱、好みの音楽、楽器演奏」²⁾を行った。

また、B)受動的音楽療法としては、「携帯用音楽プレーヤーに『パーキンソン病の音楽療法CD』(林ら2005)¹⁾を入れ、患者の歩行率に近いリズムの音楽をPT.OT訓練中に聞きながら歩行訓練を週5回(40分/回)行った。」²⁾。

(2) 音楽療法プログラムの有効性検証と、MTCL-YK(S)の信頼性・妥当性検証と修正案1(MTCL-YK(S)-1)の作成

(2)-1 音楽療法プログラムの有効性検証

(1)で選定された音楽療法プログラム(受動的音楽療法・能動的音楽療法)を音楽療法実施対象36例(男性16名、女性20名、平均年齢69.1歳、平均罹病期間83.7ヶ月)に、5週間の集中入院リハビリテーションにおいて実施した。

MTCL-YK(S)の項目4分類について、セッション開始と終了時の得点の平均値の比較をt検定を用いて行ったところ、「共通項目」(t=-2.38, p<.05)、「音楽場面」(t=-9.77, p<.001)、「対人場面」(t=-11.35, p<.001)、「全体平均」(t=-13.15, p<.001)において有意な上昇が認められ、音楽療法プログラムの有効性が示唆された。

さらに集中入院リハビリテーションの音楽療法プログラムは、OT.PTとの訓練併用で実施されているため、音楽療法自体の効果を明らかにする必要性から、OT.PTのみ実施(受動的音楽療法・能動的音楽療法を実施しない)のコントロール群との比較検証も行った。

その結果、実施群ではUPDRS part (日常生活動作)・part (運動能力) FIM運動項目・FIM認知項目、CAS面接評価・質問紙法、50m歩幅とSDSで有意な改善が認められ、コントロール群ではFIM運動、50m歩行速度・歩幅、CAS面接のみ得点が有意に向上したがUPDRSは有意傾向に留まり、それ以外の項目では有意差は認められなかった²⁾。

これらのことから、集中入院リハビリテーションにおいて音楽療法プログラムを併せて適用することは、パーキンソン病治療に、より有効であることが明らかとなった(表2)。

表2 入院リハビリテーションにおける実施群とコントロール群の比較

	音楽療法実施群 (n=36)			コントロール群 (n=11)		
	入院1週目 M (SD)	入院5週目 M (SD)	t値	入院1週目 M (SD)	入院5週目 M (SD)	t値
UPDRS(part)	14.33 (5.87)	10.17 (4.58)	6.03***	17.91 (6.49)	15.45 (8.17)	2.02*
UPDRS(part)	28.39 (11.11)	24.36 (9.79)	4.13***	30.73(13.25)	28.09 (14.09)	2.01*
FIM 運動項目	66.08 (13.66)	73.22 (11.50)	-6.72***	59.09 (16.55)	67.36 (14.64)	-5.87***
FIM 認知項目	28.03 (5.87)	29.69 (4.94)	-4.18***	29.27 (4.88)	29.55 (5.92)	-0.26
歩行速度	52.19 (19.14)	59.06 (18.76)	-4.22***	43.34 (15.34)	59.61 (14.51)	-4.28**
歩幅	45.64 (12.61)	50.16 (13.00)	-3.40**	38.29 (7.99)	48.06 (9.92)	-4.13**
SDS	43.92 (7.81)	41.36 (8.94)	-2.95**	47.40 (9.68)	41.00 (16.81)	0.96
CAS 面接	25.73 (11.44)	13.01 (10.75)	9.17***	26.66(18.40)	24.59(18.17)	3.39*
CAS 質問紙法	37.63(9.16)	27.20 (11.38)	7.74***	38.89(13.96)	36.36(15.57)	0.58

* p<.1 **p<.05 ***p<.001

(2)-2 MTCL-YK(S)の信頼性・妥当性検証と修正案1(MTCL-YK(S)-1)の作成

本研究で選定された音楽療法プログラムの有効性が検証できたことから、本プログラムを用

いて、さらに5週間、音楽療法を実施し、信頼性検証としては、リハビリテーション病院でのパーキンソン病対象の音楽療法において、MTCL-YK(S)を用いて、音楽療法の対象者個人について評価を行い、評価のしづらさや問題点を明らかにし、評価表使用に際しての視点・視座を統一した。また妥当性検証については、問題としてあがった点について、音楽療法、臨床心理学、脳神経内科学、整形外科学それぞれの専門家間で検討を重ね、項目内容について修正案(MTCL-YK(S)-1)を作成した。

(3) 修正案 MTCL-YK(S)-1 の信頼性・妥当性検証と修正案 2(MTCL-YK(S)-2) の作成

MTCL-YK(S)-1 についての信頼性・妥当性検証を行うため、研究協力者(5名)でパーキンソン病ケースの音楽療法実践場面の記録映像を視聴し、MTCL-YK(S)での評価と、MTCL-YK(S)-1での評価において、評価者間の評価得点のズレ(得点の分散)がどのように変化しているかを検証した。その結果、分散の全体の平均値は $\sigma^2=0.59$ (MTCL-YK(S)) $\sigma^2=0.45$ (MTCL-YK(S)-1)に減少が見られ、ズレが小さくなっていることが明らかとなった。

さらに、因子毎の分散の平均値比較では、「共通項目」($\sigma^2=0.22$ $\sigma^2=0.45$)、「音楽場面」($\sigma^2=0.36$ $\sigma^2=0.34$)、「対人場面」($\sigma^2=0.38$ $\sigma^2=0.37$)と、「音楽場面」「対人場面」ではズレがほぼ変わらないこと、また「共通項目」ではズレが大きくなっていることが示唆された。

そこで項目別に分析したところ、H(身体機能)($\sigma^2=0$ $\sigma^2=0.45$)、M-C(協調性)($\sigma^2=0$ $\sigma^2=0.55$)、M-D(情緒性)($\sigma^2=0.45$ $\sigma^2=0.55$)、M-E(歌唱)($\sigma^2=0.45$ $\sigma^2=0.55$)、P-A(積極性)($\sigma^2=0$ $\sigma^2=0.45$)、P-B(持続性)($\sigma^2=0.45$ $\sigma^2=0.54$)の結果が得られ、6項目でズレが大きくなっていることがわかった。そのため、再度5週間音楽療法を実施し、特にズレの大きかった項目を中心に、評価における問題点を検討し、下位項目の修正を重ね、MTCL-YK(S)-2を作成した。

(4) 修正案 (MTCL-YK(S)-2) の検討と、パーキンソン病対象用音楽療法チェックリスト MTCL-YK(PD: Parkinson's Disease version)の信頼性・妥当性検証と確定

(4)-1 修正案 (MTCL-YK(S)-2) の検討

修正案(MTCL-YK(S)-2)では、H(身体機能)の下位項目に、パーキンソン病の評価尺度である Hoehn-Yahr の重症度分類の評定段階を記載していることについて、音楽療法実践場面で対象者の臨床像を捉えるのに、4段階評定の MTCL-YK(S)-2 と、Hoehn-Yahr の重症度分類の5段階評定が合わないことが改めて確認され、Hoehn-Yahr の重症度分類の段階については、病院内での判定結果を付記する欄を設けることで、H(身体機能)の下位項目からは、外すこととなり、MTCL-YK(PD)を確定した(表3)。

(4)-2 MTCL-YK(PD)の信頼性検証

MTCL-YK(PD)の信頼性検証のため、音楽療法実践場面の記録映像を4名の研究協力者で聴取し、「修正前」(MTCL-YK(S)と、「修正後」(MTCL-YK(PD)を用いて評価を行い、評価者間の評価得点のズレが減少しているかどうかを数量的に分析した。その結果、全体の分散の平均は $\sigma^2=0.59$ $\sigma^2=0.32$ に減少し、「共通項目」($\sigma^2=0.25$ $\sigma^2=0$)、「音楽場面」($\sigma^2=0.39$ $\sigma^2=0.06$)、「対人場面」($\sigma^2=0.35$ $\sigma^2=0.31$)においても明らかに減少しているという結果が得られた。信頼性が高まったことが示されたと言えよう。尚、「対人場面」($\sigma^2=0.31$)でズレがある点については、特にP-C(協調性)とP-F(non-verbal)の下位項目の評定者間の「解釈」のズレによることが明らかとなり、今後MTCL-YKシリーズのマニュアル作成を行う際に評価における場面設定を明確にしてそのズレの減少が可能となるであろうことが話し合われ、今後の研究課題となった。

また、今後の追加分析として、研究協力者5名で、重症度の異なるケースについて同一セッション映像を視聴し、級内相関係数を用いて評価者間信頼性を検証する予定である。

(4)-3 MTCL-YK(PD)の妥当性検証

MTCL-YK(PD)の妥当性検証については、今回、MTCL-YK(PD)が完成した後、リハビリテーション病院で実施されたパーキンソン病ケースについて、統計処理が可能な度数分の得点結果が得られた他の検査指標と併存的妥当性を検証した。機能的自立度評価表(Functional Independence Measure: FIM)の運動・認知項目と標準意欲評価(Clinical Assessment for Spontaneity: CAS)の面接評価について、Pearsonの相関係数を用いて分析を行ったところ表4の結果となった。ADLを捉えるFIMの認知項目及び意欲や自発性を捉えるCASにおいて、MTCL-YK(PD)の項目4分類全てについて有意な相関が認められたことは、パーキンソン病対象の評価表として併存的妥当性が高められたことが示唆されたと言えよう。

表4 MTCL-YK(PD)の併存的妥当性

	n	共通項目	音楽場面	対人場面	全体平均
FIM(運動)	17	0.80**	0.24	0.21	0.31
FIM(認知)	18	0.84**	0.52*	0.58**	0.63**
CAS(面接)	16	-0.66**	-0.59**	-0.77**	-0.74**

** p<.01 * p<.05

今後、パーキンソン病スケール(Unified Parkinson's Disease Rating Scale: UPDRS)、自己評価式抑うつ性尺度(Zung's Self Rating Depression Scale: SDS)などの指標との併存的妥当性分析を行っていきたい。

そして前研究と本研究で明確となった、MTCL-YKシリーズのマニュアル作成という課題について現在の研究体制を継続して、開発研究を進めていきたいと考える。

表3 MTCL - YK(PD)(Music Therapy Check List-YK(PD:Parkinson's Disease version))

	1	2	3	4
G(認知機能)	セッションの内容をほとんど理解できない	セッションの内容を少し理解できる	セッションの内容をだいたい理解できる	セッションの内容を十分理解できる
理解度 (セッション内で)	活動内容を個別に説明しても、理解することが難しい ・課題に取り組むことができない	個別に説明があれば、理解し課題に取りかかる	個別(補足)説明がなくても、理解し課題に取りかかる	課題に自ら取り組むことができる
H(身体機能)	起立・歩行などを動かすことがほぼできない	自分で体を動かすことが少しできる	自分である程度体を動かすことができる	自分で思うように体を動かすことができる
障害の程度	起立や歩行ができない ・日常生活活動の低下が著しくみられる ・手や足を意図的に使うことが難しい	起立・歩行は何かができる ・明らかな歩行障害、姿勢保持障害がみられる ・手や足を少し意図的に使う	自立歩行ができる(補助手段の有無含む) ・両側の障害で振戦、無動もしくは運動緩慢、(筋)強直がみられる ・手や足をある程度意図的に使う	自立歩行ができる ・体の片側のみにくわいて軽度(振戦、無動)もしくは運動緩慢、(筋)強直がみられる ・細かい動作などもできる

ON時
OFF時
Hoehn-Yahrの重症度分類 段階

	1	2	3	4
M-A(積極性)	ほとんど活動に参加しない	少し活動に参加する	だいたい活動に参加する	熱心に活動に参加する
主体性・強さ	活動する様子ほとんど見られない ・働きかけられても断る	働きかけられれば、補助があると少し活動する ・音楽が始まると(自分のペースで)活動する (なんとなく、自発的ではない)	働きかけられれば、補助があると熱心に活動する ・音楽が始まると(自分のペースで)熱心に活動する ・好きな音楽・活動では熱心に参加する	自分の参加意思を持って、熱心に活動する ・どの活動にも熱心に参加する
M-B(持続性)	ほとんど活動が見られない	少し活動が見られる	だいたい活動が見られる	常に活動が見られる
参加態度の波	ほとんど活動が見られない	あまり活動に集中していない、気持ちがそがれる	だいたい活動に参加している(部分的に集中する)	常に活動する ・集中している
M-C(協調性)	周囲にほとんど合っていない	周囲に少し合っている	周囲にだいたい合っている	周囲によく合っている
同調・協調	活動がない ・別の活動をする、周囲に合わせない、場を乱す	マイペースに活動する ・音楽の刺激に合わせて活動する (周囲の様子や、流れに合わせているのではない)	マイペースだがだいたい合っている、乱さない ・流れに沿っての動きが見られる	(意図的に)周囲に合わせて活動する ・周りに合うように自分の音量・リズム・テンポなどを調節・工夫する
M-D(情緒性)	情緒表現がほとんど見られない	情緒表現が少し見られる	情緒表現がある程度見られる	情緒表現が豊かに見られる
喜怒哀楽	表情や音楽的な情緒表現がほとんど見られない	好きな音楽で音楽的な情緒表現が時々見られる	音楽的な情緒表現が見られる (テンポの変化や抑揚をつけるなど) ・感想や気持ちを表す(音楽活動に関して)	音楽を感じて様々な情緒表現や共感が見られる (歌詞に沿った声を出す、音楽の雰囲気や合った鳴らし方を、悲しい曲に涙するなど)
M-E(歌唱)	歌唱活動がほとんど見られない	歌唱活動が少し見られる	歌唱活動がある程度見られる	歌唱活動がよく見られる
	声を出して歌うことが難しい	声を出す、歌おうとする ・小声で聞き取りにくい(不明瞭) ・発声が持続しない	テンポや音程・音量を調節して歌おうとする、 ・自分のペースで歌詞・メロディを歌う	歌詞・メロディを歌う(明瞭) ・伴奏に合わせて調節・工夫する(テンポ・音程・音量)
M-F(演奏)	意欲がほとんど感じられない	やや意欲が感じられる	ある程度意欲が感じられる	非常に意欲が感じられる
楽器の操作がほとんど見られない	楽器の操作がほとんど見られない	楽器の操作が少し見られる	楽器の操作がある程度見られる	楽器の操作がよく見られる
(記憶力が強く、楽器を鳴らすことが難しい) ・振戦が頻りに見られる ・速度に合わせた簡単なリズム打ちが難しい	(記憶力、働きかけがあれば) ・簡単なリズム打ちができる(操作面) ・リズムやテンポを一定に保てない	(記憶力、働きかけがあれば)一定時間リズムやテンポを持続出来る ・2種類以上の音が鳴らせる(操作面) ・曲に合わせて部分的に演奏できる(時間軸)	(記憶力、働きかけがあれば)一定時間リズムやテンポを持続出来る ・2種類以上の音が鳴らせる(操作面) ・曲に合わせて部分的に演奏できる(時間軸)	曲に合わせて意図的に演奏できる(操作面・時間軸) ・メロディや楽器を鳴らすことができる
M-G(音楽鑑賞)	意欲がほとんど感じられない	やや意欲が感じられる	ある程度意欲が感じられる	非常に意欲が感じられる
意欲がほとんど感じられない	意欲が感じられる	意欲がある程度見られる	意欲が豊かに見られる	意欲が非常に豊かに見られる
活動しない ・「やめておく」と言う	働きかけがあれば参加の意思が見られる ・活動しようとする様子が見られる(部分的)	活動しようとする様子が見られる ・気持ちがセッションに向いている	活動しようとする様子が見られる ・気持ちがセッションに向いている	率先して参加するなど意欲込みが感じられる ・「ーしたい」「頑張る」などやる気を伝える ・表情がイキイキしている ・気持ちがセッションに向き、楽しんでいる

	1	2	3	4
P-A(積極性)	ほとんど参加しない	働きかけられれば参加する	だいたい活動に参加する	熱心に活動に参加する
主体性・強さ	働きかけられれば反応はあるが、意思表示はほとんど見られない	働きかけられれば意思表示をする yes,no ・楽器を提示すると意思表示をする	働きかけられれば意見を言う、リクエストする ・働きかけられれば楽器を遊ぶ、伝える ・他者に推薦されて、役割を引き受ける	自分から意見を言う(視線・声で訴える場合も含む) ・自分からしたい楽器を遊ぶ、歌をリクエストする
P-B(持続性)	ほとんど活動が見られない	少し活動が見られる	だいたい活動が見られる	常に活動が見られる
(対人交流への参加態度の波)	参加しない ・人の交流が見られない	気持ちがそがれたり、眠っていることがある ・あまり集中していない	だいたい活動に参加している(部分的に集中する)	常に参加する(常に交流や関わりを持っている) ・集中している
P-C(協調性)	周囲にほとんど合っていない	周囲に少し合っている	周囲にだいたい合っている	周囲によく合っている
同調・協調	別の活動をする、場を乱す	私語が見られる、マイペースに過ごす ・周りに合った反応が時々見られる	私は強いが、周りを考えている ・特に意見は見えないが、反対もしない	周りを考えて、自動的に関わり、他に譲ったりする
P-D(情緒性)	情緒表現がほとんど見られない	情緒表現が少し見られる	情緒表現がある程度見られる	情緒表現が豊かに見られる
喜怒哀楽	情緒表現がほとんど見られない	自分の気持ちを伝えることは控えめ	働きかけられれば気持ちを表す (言語・非言語)	様々な表現が見られる(喜怒哀楽) ・自分から気持ちをよく表す(言語・非言語)
P-E(verbale)	声・言葉による交流はほとんど見られない	交流が少し見られる	交流がある程度見られる	自分からよく交流する
声・言葉でのコミュニケーション	声・言葉での反応がほとんど見られない	声や言葉での反応が少しある(返事など) ・小声で聞き取りにくい(不明瞭)	働きかけられれば、声や言葉でやりとりする ・自分から声や言葉で伝える(文字盤を含む)	自分から声や言葉で他者とよくやりとりする (文字盤での会話を含む)
P-F(non-verbale)	意欲がほとんど感じられない	やや意欲が感じられる	ある程度意欲が感じられる	非常に意欲が感じられる
身体・行動でのコミュニケーション	意欲がほとんど感じられない	交流が少し見られる	交流がある程度見られる	自分からよく交流する
働きかけられれば反応がない	働きかけられれば反応が少しある(視線を合わせず、手や足を動かすなど)	働きかけられれば表情・ジェスチャーを交えて伝える ・控えめだが自分から表現がする	働きかけられれば表情・ジェスチャーを交えて伝える ・自分から他者とやりとりをする	表情・ジェスチャーを交えて表現豊かに伝える ・自分から他者とやりとりをする
P-G(対人場面)	意欲がほとんど感じられない	やや意欲が感じられる	ある程度意欲が感じられる	非常に意欲が感じられる
意欲がほとんど感じられない	意欲が感じられる	意欲がある程度見られる	意欲が非常に豊かに見られる	意欲が非常に豊かに見られる
活動しない ・「やめておく」と言う	働きかけがあれば参加の意思が見られる ・活動しようとする様子が見られる(部分的)	活動しようとする様子が見られる ・気持ちがセッションに向いている	活動しようとする様子が見られる ・気持ちがセッションに向いている	率先して参加するなど意欲込みが感じられる ・「ーしたい」「頑張る」などやる気を伝える ・表情がイキイキしている ・気持ちがセッションに向き、楽しんでいる

<引用文献>

- 1) 林明人：パーキンソン病に効くCDブック. マキノ出版、東京、2005
- 2) 梶田美奈子、小原依子、渡邊幸子、大串智恵、河村美帆、奥田志保、白川雅之、司馬良一：パーキンソン病に対する入院リハビリテーションにおける音楽療法の有効性～音リズム刺激を取り入れたPT・OTと音楽療法を組み合わせる～. 近畿音楽療法学会誌, Vol.17:54-59, 2019
- 3) 小原依子、加藤寛：音楽療法の効果に関する実践的研究(第1報) - チェックリストによる評価法を中心にして - . 兵庫県こころのケアセンター研究報告書 - 平成17年度版 - (財団法人21世紀ヒューマンケア研究機構 兵庫県こころのケアセンター):79-95, 2005.
- 4) 小原依子：認知症等の高齢者を対象とした音楽療法の効果に関する実践研究. 第15回ニッセイ財団高齢社会ワークショップ報告書:1-4, 2007
- 5) 小原依子、前田潔、中澤清：認知症等の高齢者を対象とした音楽療法の効果に関する実践的研究(第報) - 長期的な音楽療法の効果を中心に - . 近畿音楽療法学会誌, vol.11:160-167, 2013
- 6) 小原依子、梶田美奈子、大串智恵、渡邊幸子、河村美帆、白川雅之、奥田志保、司馬良一：リハビリテーション病院における音楽療法の効果判定に関する実践的研究 - 注意障害のための音楽療法プログラムの有効性の検証 - . 神戸女子大学文学部紀要, 第50巻:73-85, 2017
- 7) 小原依子・梶田美奈子・大串智恵・渡邊幸子・河村美帆：「リハビリテーション病院における音楽療法の効果判定に関する実践的研究(第報) - 注意障害対象用の評価尺度の開発を中心に - . Japanese Bulletin of Art Therapy 48(2), 89-104, 2018

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

- 1) 梶田美奈子、小原依子、渡邊幸子、大串智恵、河村美帆、奥田志保、白川雅之、司馬良一：
「パーキンソン病に対する入院リハビリテーションにおける音楽療法の有効性～音リズム刺激を取り入れたPT・OTと音楽療法を組み合わせ～」,近畿音楽療法学会誌 Vol.17, 54-59, 2019
- 2) 小原依子・梶田美奈子・大串智恵・渡邊幸子・河村美帆：「リハビリテーション病院における音楽療法の効果判定に関する実践的研究(第報)-注意障害対象用の評価尺度の開発を中心に-」,Japanese Bulletin of Art Therapy 48(2), 89-104, 2018, 89-104
- 3) 小原依子、梶田美奈子、大串智恵、渡邊幸子、河村美帆、白川雅之、奥田志保、司馬良一：
「リハビリテーション病院における音楽療法の効果判定に関する実践的研究-注意障害のための音楽療法プログラムの有効性の検証-」,神戸女子大学文学部紀要 第50巻, 73-85, 2017
- 4) Yoriko Kohara, Minako Kajita, Chie Ohgushi, Sachiko Watanabe, Miho Kawamura, Shiho Okuda, Masayuki Shirakawa, Ryoichi Shiba: Development of a Rating Scale of Music Therapy in a Rehabilitation Hospital, Music Therapy Today WFMT online journal 13(1), pp.412-413, 2017
- 5) Minako Kajita, Yoriko Kohara, Chie Ohgushi, Sachiko Watanabe, Miho Kawamura, Shiho Okuda, Masayuki Shirakawa, Ryoichi Shiba: The Effectiveness of Music Therapy as Part of In-hospital Rehabilitation for Parkinson's Disease, Music Therapy Today WFMT online journal 13(1), 382-383, 2017
- 6) Miho Kawamura, Yoriko Kohara: The effectiveness of individualized music therapy based on musical preferences, Music Therapy Today WFMT online journal 13(1), pp.396-397, 2017

〔学会発表〕(計5件)

- 1) 梶田美奈子、小原依子、大串智恵、渡邊幸子、河村美帆、奥田志保・白川雅之・司馬良一：
「パーキンソン病患者に対する音リズム刺激と嗜好を反映した音楽療法の有効性～兵庫県立リハビリテーション中央病院における取り組み～」,第57回全国自治体病院学会
- 2) 渡邊幸子、大串智恵、梶田美奈子、河村美帆、小原依子、司馬良一：「パーキンソン病に対する入院リハビリテーション(第報)～嗜好曲を反映した選曲の有効性の検討～」,日本音楽療法学会 第16回近畿学術大会
- 3) Yoriko Kohara, Minako Kajita, Chie Ohgushi, Sachiko Watanabe, Miho Kawamura, Shiho Okuda, Masayuki Shirakawa, Ryoichi Shiba: Development of a Rating Scale of Music Therapy in Rehabilitation Hospitals, The 15th World Congress of Music Therapy(Tsukuba International Congress Center)
- 4) Minako KAJITA, Yoriko Kohara, Chie Ohgushi, Sachiko Watanabe, Miho Kawamura, Shiho Okuda, Masayuki Shirakawa, Ryoichi Shiba: The Effectiveness of Music Therapy as Part of In-hospital Rehabilitation for Parkinson's Disease, The 15th World Congress of Music Therapy(Tsukuba International Congress Center)
- 5) Miho KAWAMURA, Yoriko KOHARA: The effectiveness of individualized music therapy based on musical preferences, The 15th World Congress of Music Therapy(Tsukuba International Congress Center)

6 . 研究組織

(4)研究協力者

- 研究協力者氏名：大串 智恵
ローマ字氏名：OHGUSHI, Chie
- 研究協力者氏名：梶田 美奈子
ローマ字氏名：KAJITA, Minako
- 研究協力者氏名：渡邊 幸子
ローマ字氏名：WATANABE, Sachiko
- 研究協力者氏名：河村 美帆
ローマ字氏名：KAWAMURA, Miho